

生活における伝統色彩文化の象徴性—日本と韓国の比較において Comparative Color Study of Japan and Korea Toy

早川 礎子

HAYAKAWA Motoko

小田原短期大学

[要約] 令和2年度に採択された公益財団法人全国幼児教育研究協会助成研究「日本の五色と韓国の五方色の生活色彩にみる玩具」の先行文献研究として行っている。民族の生活文化とは、民族固有の生活様式に深く関わっているものであり、自然環境の中で得たこれらの造形感覚は、各国の歴史の中で衣食住を中心とした暮らしの生活文化として継承されてきた。幼児の環境教育において、保育内容「環境」に関する保育制度に関する研究はこれまで行われてきたが、伝統色彩文化に関する研究の視点は多くない。

本稿では、日本と同じ東アジア文化圏にある韓国の五方色の伝統文化教育の継承の先行文献を調査し、その伝統色彩文化がもつ象徴的意味について検討する。

[キーワード] 日本, 韓国, 生活文化, 玩具, 色彩

1. はじめに

本研究は令和2年度に採択された公益財団法人全国幼児教育研究協会助成研究の課題「日本の五色と韓国の五方色の生活色彩にみる玩具」の先行文献研究として行っている。

2. 研究目的および方法

本論では日本と同じ東アジア文化圏にある韓国の五方色の伝統文化教育の継承の先行文献を調査し、その伝統色彩文化がもつ象徴的意味について検討していきたい。この両国における生活の伝統色彩が日本と韓国の玩具へ影響を与えていることは明確であり、また、それらとの関連性が深いことから幼児の環境教育を行うに当たって、その位置づけを検討していく必要がある。

はじめに日本と韓国の玩具の伝統色彩を概観し、次に韓国の衣食住の生活文化の中にある五方色の象徴性について述べる。最後に日本と韓国の伝統色彩文化を比較しつつ、考察する。

3. 結果と考察—身近な環境にみる日本の五色と韓国の五方色

日本各地に伝わる伝承玩具には、様々な素材が用いられ、人々の日常的な願いが込めら

れて作られた数多くある。特にそれらには色彩表現によって象徴性が表されている。

古代より、祭祀に用いられる朱色は日本人にとって特別な色彩であったことが知られている。日本の縄文時代以降の古代社会では「赤い色」に何らかの特別な意味をもたせてきた形跡がある。これは赤い色には病魔退散や災害厄除けの強い呪術力があるという民間信仰によるものである。日本各地には、天然痘除けの郷土玩具が数多く見られている¹。

埼玉県鴻巣市産の鯛車や達磨等は赤く彩色されていて、俗に赤物と呼ばれている。

福島県会津若松産の張り子玩具の赤ベコ(赤く塗られた牛)の赤の由来は、赤い色は太陽の色や火の色で、悪い霊を追い払うことから、天然痘の神様を追い払うとされていた。や大阪府堺市産の土製玩具のピンピン鯛、愛媛県松山市の張り子玩具の姫だるまもまた同じく赤く塗られている。伝承玩具のこけしたや、でんでん太鼓、招き猫には朱色が多く使われている²。

潮田(1967)の調査によると伝承玩具の使用色の全国順位は1位は赤、2位は黒、3位は白、4位は黄、5位は緑であった³。

澤村(2005)は、赤に祈りの象徴性が加味されていることを指摘している。

3世紀頃、「倭人は中国人が白粉で化粧するように(赤で一早川注)身体を塗って飾り立てている」と記している。また、古代部族の族長を弔った墳墓の中から朱の顔料が発見されている。

日本の五色は青・赤・黄・白・黒(玄)の五色である。染料や色彩認識の関係で青は緑、黒は紫で表されることが多いので、実際には緑、赤、黄、白、紫になっていることもある。鯉のぼりの吹き流し・七夕飾りの吹き流し・短冊・端午の節句のちまきに五色の糸が結ばれていたことは五色に魔除けの意味があることを示している。

この陰陽五行説とは、万物は陰と陽の二気「木・火・土・金・水」の五行で成り立ち、これら陰陽五行の要素で世の中は回っているという思想で、日本文化に深く関わっている。五行説は紀元前に中国で生まれた自然哲学である。森羅万象全ての要素が「木・火・土・金・水」の五つの要素になると解釈され、その五つの元素は互いに影響を与え合い、相互作用によって天地万物が変化し循環していくという考え方である。陰陽五行説の陰と陽で世界は構成されているという思想である。

五行には、方位・時間・星・臓器・感情・道徳観が当てはめられており、生きる指針とされ、色もその思想のひとつとされている。木は青、火は赤、土は黄、金は白、水は黒の五つの色であり、韓国では五方色と呼ばれていた。先行文献の検証から、陰陽五行説の五色を受け入れた中で、特に赤に特別な象徴性をもたせて玩具に取り入れてきたことが読み取れる。

次に韓国の伝承玩具についてみていきたい。これらの伝承遊びについては、令和2年9月10日・11日の駐日韓国文化院(東京都新宿区)の韓国人職員から解説を聞いたことを要約する。

旧暦1月1日は、ソルラルと呼ばれる韓国のお正月である。ソルラルに欠かせないのが、お正月遊びである。韓国の伝承遊びは350種類といわれている。

ユンノリは、三国時代に起源を持つ韓国固有の民俗遊びである。サイコロの代わりに「ユッ」という4本の木の棒を投げる。これは白木でできている。

チェギチャギは、小銭を紙で巻いて「羽根(チェギ)」を作り、チェギを地面に落とさないうように蹴り続ける。今日のチャギには五色が使われているが、伝承遊びの中のチャギには彩色は特にされていない。

ノルティギは、わらの束や穀物の入った袋などの上に細長い板をのせ、向かい合った2人が交互に高く飛び上がる遊びである。これにも、彩色のある玩具に用いられていない。ペンイチギは、こま回しである。50cmほどの細い棒に紐をつけ、紐でこまをたたいて回しながら遊ぶ。冬の代表的な遊びで、昔は凍った川や池の上で、子どもたちが木で作った手作りのこまを回して遊ぶ光景がよく見られたという。伝承玩具としてのコマの色彩は、赤・青・白または、赤・黄・青である。

ヨンナルリギは凧揚げである。韓国の凧は、四角い形やエイの形をしたものが一般的である。風を吸収し、方向を調節するために真ん中に穴が開いているのが特徴である。

韓国では、1年の無病息災を願うために、「送厄」や「送厄迎福」と書いた凧を高く揚げ、糸巻きの糸が全てなくなったら糸を切って遠くに飛ばしてしまうという風習がある。この凧の色彩は、赤・黄・青・黒・白等が使われている。

韓国の五色は、五方色と呼ばれている。これらの韓国の伝承遊びの中に見られる色彩は五方色が満遍なく使われていることが窺われる。今日、韓国の様々な方面で使われる五方色は、高句麗の古墳壁画にもこの五方色が使われているように、朝鮮半島に住む人々は昔

からこの色を多用してきたという歴史的背景がある。

4. 韓国の幼児教育史の概観

幼児教育史の中、主に欧米の教育理論を受け入れ、幼児教育の発展を図ってきた。1992年9月30日改訂され、1995年3月1日から施行されている韓国の第6次幼稚園教育課程は①子ども中心教育②教師のための具体的な指針提示③教育運営の構造の見直しという点で従来と比べ、画期的な改訂である。特に、子供中心主義という理論的根拠に立って教育を強調する教育方法はモンテッソーリ教育法と多くの共通点を有している⁴。またより一層具体的な伝統教育の研究・教育・保育実践が行われてきている⁵。

その教育内容は「教育課程が追及する4つの人間像」である。「我が文化に関する理解の土台の上、新しい価値を創造できる人」である。また、教育課程の内容の五つの領域「健康生活」「社会生活」「表現生活」「言語生活」「探求生活」の中、「社会生活」の領域では「我が国の象徴と伝統に関心を持つ」とあり、「表現生活」の領域では「わが国の芸術に接する」「わが国の伝統芸術に親近感を持ち関心を持つ」、「言語生活」の領域では、伝承童話、わらべ歌を楽しく聴く」など具体的な伝統文化教育の内容が提示された⁶。

伝統文化と関連した経験を通じて親近感を持つ」があり、「わが国の名節を調べる」「名節の風俗について調べる」の内容が示されている。

2012年3月、韓国において、公教育の一環として幼児教育の新しい政策「5歳ヌリ課程」が全国的に施行され、幼児教育の無償化が始まった。幼児教育及び保育の必要性とその目的に関して、韓国幼児教育振興法の第1条によると「この法律は、幼児によい教育環境を用意して心身発達の充実を期するとともに無限の潜在的な力を伸長させることにより、将来健全な人格を有する国民に成長させ、個人

としての幸福を享受し、さらに個人の力量を国家発展に寄与させるために幼児教育及び、保育を振興することを目的とする」とその目的が明記されている。更に、12年に5歳児対象にヌリ課程(就学前義務教育課程)が導入され、2013年には満3・4歳児にまで対象を広げ実施されている。ヌリ課程は5領域『身体運動・健康、コミュニケーション、人間関係(社会関係)、芸術経験、自然探求』と11テーマ『幼稚園と友達、私と家族、住んでいるところ、健康と安全、動植物と自然、生活用具、私の国、世界のいろいろな国(4・5歳)、交通機関、季節、環境と生活』で統一された教育課程である。

国家の先導の下、幼児教育では伝統教育の継承が行われてきたことを示唆している。

5. 韓国の衣服の伝統色彩文化

韓服(ハンボク)とは、韓国人が着てきた固有の服の総称(男性用:パジチョゴリ、女性用:チマチョゴリ、子供用:セクトンチョゴリ)で、一般的に李朝朝鮮時代の服飾を受け継いだもので、現在でも、結婚式、還暦等の通過儀礼や国際的な行事の折に着用されている。

韓国服の場合は、和服にみられるように文様が占める美的要素は比較的軽く、洋服と同じように、その色とデザイン(プロポーション、ライン、地質など)が重視される。つまり、色彩の配色バランスが衣服の美の基準であったことが窺われる。しかし、今日見られる多くの色彩を用いた衣服の後世になって出現している。

色物の衣服を着用する場合は、上下同色と上下別色の二通りがある。上下同色に用いられる色は、白・黒・灰色・鼠色などに限られるが、上下別色の場合も、子供服以外三色以上を用いることは少ない。また、上下の配色については、特に規定や忌避はない。この組み合わせは、男女、年齢によって異なるが、また、それぞれの地方によっても特色のある組み合わせが行われている。しかし、原則的

には対色組み合わせが主で、同系色の組み合わせは極めて稀である。すなわち、赤に緑、黄と紫、粉紅と玉色という反対組み合わせや、黄に赤、赤に青、橙に紫紺という対比組み合わせが多い。服色組み合わせの最も代表的な例は、婚礼時の新婦の衣装で、これは上が黄、下が赤と定められている。

内田(2005)によれば、韓国人がビビッド系の色使いをすることについて全体として国民性や、その文化要因がかなり影響していると指摘している。その相違はビビッド系の色使いのものに対しての捉え方が日本では派手、華やかに捉えられているのに対して、韓国はそれほどでもないことを指摘する⁷。

韓国の気候は大陸性気候で、韓国北部に位置するソウルは大陸性気候での影響が強く、寒暖の差が大きい。南部の釜山、済州島は、温暖な気候である。その気候は日本のように四季はあるが、夏が暑く、冬が寒く、春と秋が短い。移行する春と秋が短いために季節感の差が激しく、四季の植物等の色彩変化も急激であることが観察される。

このような自然環境にある色彩の彩度の高い対照性が韓国人の色彩感覚に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

服飾の造形美を表現する要素として、構成各部のバランス、着装スタイルの安定感がある。韓国服のプロポーションにみられる安定感、上下および縦横の比率が黄金分割比に近いことが原因である。韓国服に色柄や縞物が見られない理由は、このプロポーションの調和を乱すことが理由であると指摘されている。韓国服の場合は、和服にみられるように文様が占める美的要素は比較的軽く、洋服と同じように、その色とデザイン(プロポーション、ライン、地質など)が重視される。つまり、色彩の配色バランスが衣服の美の基準であったことが窺われる。対色組み合わせを最も強調した衣装は舞踏衣にみられ、五彩の原色が惜しみなく用いられる。

原色を多用した韓服であるチョゴリの上に重ねて着る上着の服であるマゴシやチマチョゴリ、女性が韓服のチョゴリやコルム(チョゴリとトゥルマキの前身ごろの両側にかかって前を整えるようになっている日本の紐のことで洋服のボタンと同じ働き)がある。

チマの腰の部分につける装身具のノリゲ等の五方色の装身具、五方色のビビンバ、韓国伝統家屋の韓屋住がある。住宅等、祭礼装束・装身具・楽器等で五方色が活用されてきた。全てが新しくはじまるお正月は、着るものもまた、頭のとっぺんからつま先まで、全て新しいもので整える。お正月のために新調し、お正月にはじめて着る晴れ着をソルビムという。カチトゥルマキには5つの色が使われている。女兒と男児では、色使いが少し異なる。女兒のカチトゥルマキは襟とコルムを紅色、または紫色にし、ム(チョゴリやトゥルマキの脇の下部分にあてる布)は藍色にする。男児は襟とコルムを藍色にし、ムを紫色にする。韓国人は陰陽五行説に基づいて伝統衣服である韓国服に五方色を入れて着ることが多くあった。悪い気を防いで無病長寿を願い、初めて迎える誕生日や名節に7歳までの子供が身につけた五方色が入ったセットンチョゴリを着せるのは、韓国服に五方色を取り入れた代表的な例である。この時、子どもに着せるセットン(色動)と呼ばれるものがある。いろいろな色の布を繋ぎ合わせて作る上着をセットンチョゴリという。チョゴリのセットンの色は水・火・鉄・土・木など、宇宙を形成している元素を意味しており、そこにはいろいろな色が織りなす色調のようにものごとが調和し着る人が平安であることを願う気持ちが込められている。

セットンとは「色を全て入れた」を省略した言葉だが、この「色」とは五方色を指す。五方色の全てを使ったセットンを子どもに着せることで、その子の無病息災と災厄防止を祈願した。

韓服とは直線と曲線の調和を通じて美を創り出す韓国人の伝統衣装である。その色彩は対比色であり、韓服のプロポーションにみられる安定感に関係し、上下および縦横の比率が黄金分割比に近いことがわかった。また、護身の象徴性を含み子供の衣装については五方色が袖部分に満遍なく使用されていることがわかった。

6. 韓国の食の伝統色彩文化

料理にとっても五方色は重要な概念になっている。料理は五色を上手く調和させることが基本とされ、それを一番典型的に表しているのが宮中料理であった。

五味五色は薬食同源と考えられ、五つの味と五つの色を揃える食事がよいとされている。たくさんの品数の料理を揃える韓定食や色とりどりの具をのせるビビンバにも五味五色が表されている。

祝宴等の時、韓国ではククスの上に乗せる五色の飾り食材は、食に五方色を使った例である。赤色はニンジン・赤トウガラシ、白色はハクサイ・ダイコン・卵の自身、緑色はホウレンソウ・キュウリ・ピーマン、黒色はシイタケ・ノリ・ワカメ・肉と分かれている。韓国の代表的な料理であるビビンバにも五方色が使われている。ご飯、その上のナムル・肉・薬味等の色彩が五方色を表している。また、九節板という料理は、周囲に8つのマスと、中央の1つのマスに合わせて9つのマスできている木器に、それぞれ季節や好みに合わせたおかずを彩りも考えながら盛った料理で、様々な五方色が均等に使われている。以上まとめると、五味五色は薬食同源と考えられているため、五つの味と五つの色を揃える食事がよいとされていることがわかった。たそして、韓国料理では五色の食材の色が鮮明に表される工夫をごま油で和える調理という方法でなされていることがわかった。

ここでも、色彩を五色で用いることが重視されていることが窺われる。

7. 韓国の住の伝統色彩文化—王宮・寺院の青丹の象徴性

青・赤・黄・白・黒の5つの五方色を基本に使用し、建築物に様々な文様と絵を描いて美しく荘厳に装飾したものを「丹青(タンチョウ)」と呼んでいる。

先史時代、神に祭祀を執り、または祭壇を飾るために始まった丹青は神秘感を与えて邪気を追い出す辟邪の意味と、威厳と権威を表す。

丹青は三国時代から盛んに使用されており、また五行思想が込められた丹青には現世の康寧と来世の祈願が込められている。丹青のほか、醤油瓶に赤唐辛子を入れてしめ縄を巻くこと、赤い輝きを出す黄土で家を建てること、新年に赤い「プジョク(お礼)」を描いて貼ること、宮廷・寺院等の丹青、古墳壁画などの建築物、さらに工芸品でも五方色が使われているのを簡単に見つけることができる。

王宮・寺院には丹青の装飾が施されている。それは青・赤・黄・白・黒を満遍なく使い、文様を描いている。三国時代より盛んに使われ、威厳を示しあらゆる方向から邪気を追い出し、現世の安寧と来世への祈願を表している。

ヒンセクとは白の意味である。ヒンは形容詞ヒダの五幹「ヒ」がセク(色)を就職するために変化した接続形である。ヒダの五幹「ヒ」は太陽を意味する。これは太陽または日の光を白色と認識したことに由来する。白(2005)は、韓国の白色観は、自然と同化概念が基本にある。素材の着色表現よりも無色に脱色した白で材質本来の素材である白への愛着は生活様式に深く浸透していると指摘している。

丹青とは、鉱物から探し出した東洋特有の青・赤・黄・白・黒の五つの色を主にし、様々な模様や絵を描き入れる技法を指す。狭い意味では主に建築物を採食する場合を指し、広い意味では仏画を描き、荘厳具などの器物を彩色することまで含む。丹青で建築物を造る場

合には壁面や天井だけではなく、主に木造建築物にもよく使われ、特宮廷や寺院のような権威ある建物に多くみられる。

装飾効果のためだけではなく、国家権力を権威づけたり、宗教的な建物、彫刻、什器などを一般物と区別して厳粛にする目的もある。また、宗教的目的の丹青は来世のような信仰世界を象徴物的な模様を通して表現する。

8. 結論

韓国では衣食住文化にある五方色は五色を均等配分し、動的な印象を表現としている。このことから、韓国人の好む色彩が明確な輪郭、浮き立つ色彩、統一的な一義性等が協調されていることが明らかになった。そして、韓国人は鮮やかな色彩、均一に整った形の美しさ、彩度の高い配色傾向が示されている。これに対して、日本の好む色彩は韓国人の好む色彩と正反対である。そして、色彩の統一性を好まず、不完全さを意識的に作り出している。それは色彩の余韻を生み出す間を重視していると言えるだろう。このような色彩に対しての民族の美意識から五色を全て使用することなく、玩具の色彩は赤を主として使用していることが明らかになった。

韓国の五方色には、各々の色彩の象徴性を有していた。そして、その五方色が使用されている韓服とは、直線と曲線の調和を通じて美を創りだす伝統衣装であり、その配色は多くは対比色であることが明らかになった。

また、護身の象徴性を含む子供の衣装については五方色が袖部分に満遍なく使用されていることが明らかになった。

住文化においても、伝統的建築構造が継承おこなわれており、寺院の建築にのみ五方色は満遍なく使用されていることが明らかになった。

食文化については、五味五色は薬食同源と考えられているため、五つの味と五つの色を揃える食事がよいとされ、和える調理方法で食材の五方色を保っていることが明らかになった。

日本と韓国の玩具および生活文化の伝統色彩の先行文献を調査し、その象徴的意味について検討してきた。日本の玩具の色彩が赤を中心としていることに対して、韓国の伝統色彩の五方色は玩具をはじめ、特別な祭事にのみ使用されるのではなく、衣食住の伝統文化全般に満遍なく使用されていることが明らかになった。

今後、更に、玩具の伝統色彩の相違点を明らかにしていくことで異文化理解につながっていくと考えられる。それが今後に残された課題である。

¹潮田鉄雄(1967),「郷土玩具から見た日本人の心」, 民俗学研究, 32 卷 3 号, pp236-242

²土居正二(2005),『郷土玩具で知る日本人の暮らしと心②長寿・安産・病気よけ・健康を願う郷土玩具』, くもん出版, p16

³前掲書, p241

⁴李善玉(1995),「韓国における「第6次幼稚園教育課程」の特質:モンテッソーリ教育法を対照として」慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 社会心理学教育学 42 卷, pp17-

25

⁵韓在熙(2007),「韓国の伝統文化教育に関する研究:幼児保育カリキュラム事例を中心に」日本教育学会大会研究発表要項, 66 卷 pp86-87

⁶前掲書, p87

⁷内田直子・小林茂雄・長倉康彦(2002),「日本女性と韓国女性の服装における場違い感の比較」繊維機械学会誌 55 卷 6 号, p69